ヴェーダーンタ・デーシカの独存論 (1)

三上俊弘

0.　さきに筆者は，ラーマーヌジャ (Rāmānuja, d. 1137?) の *Gītābhāṣya* (=**GBh**) における〈独存を求める者 (kaivalya-arthin)〉に関する記述を検討して，論述に一貫性を欠く面のあることを指摘し，さらにそれに付け加えて，ヴェーダーンタ・デーシカ (Vedānta Deśika, alias Veṅkaṭanātha, 1268—1369) がその曖昧さをどう処理しているかも簡単に紹介した[1]。本稿ではそのデーシカの独存観をさらに詳しく探りたい[2]。

1.1　まず最初に，どうしてデーシカの独存を考察せねばならないのかを確認しておきたい。この考察は二つの理由で意味を持つと思う。第一は，前に述べたとおりラーマーヌジャの独存観そのものがどうもはっきりしないことであり，第二は，ラーマーヌジャ以後のヴィシシュタ・アドヴァイタ派において独存に関し見解の違いが生じたことである。

そしてこの二つは，同派における独存の位置づけの難しさと無関係ではない。そこで，その困難なる所以を，まず若干述べておこう。そもそも「独存」という解脱の形態は，アートマンが付加物を捨てて本来の自己を取り戻すことであり，その起源を探ればウパニシャッド以来の「真の自己を知り，それに到達する」という解脱観に行き着く。そしてかかる解脱観は，ヴェーダーンタ派においても，アドヴァイタ派などでは全く問題なくそのまま引き継がれたようだ。ところがヴィシシュタ・アドヴァイタ派では事情が異なる。〈真の自己への到達〉と解脱との間にギャップがあるからである。この派によれば，解脱とは，〈最高神＝ブラフマン（最高我）への到達〉により最高神のこの上なき歓喜を直覚することであり，しかも個々のアートマンはあくまでも—解脱した時においてすらも—最高神とは異なる原理とされる。つまり〈真の自己への到達〉がそのまま〈最高神への到達〉とはならないのである。

解決方法としては二つ考えられよう。一つは，〈真の自己への到達〉を解脱までのプロセスの中に組み込んでしまうこと，そしてもう一つは，〈真の自己への到達〉だけでもとりあえず解脱として認めてしまうことである。しかしいずれの

解決策も万全でない。まず前者を採る場合は，聖典を解釈する上での困難が避けられないだろう。というのは，〈真の自己への到達〉そのものを解脱とする考えはウパニシャッドなどの聖典で強固であり，聖典を解釈していく際，どうしてもこの方法では切り抜けられない場合，つまり，〈真の自己への到達〉だけでも解脱と認めねばならない場合も出てくるからである。一方後者を採れば，ともかくこの難題はクリアできるが，人間の究極目標であるはずの解脱が〈真の自己への到達〉と〈最高神への到達〉という二種類あることになってしまうであろう。

そこでラーマーヌジャの場合であるが，彼は基本的には前者を採用しながらも，聖典との“妥協”の結果，〈独存を求める者〉にも解脱があると認めようとした。しかし問題なのは，そのために，〈独存を求める者〉もまた最高神に達する，としたことである。それならば最高神への到達という意味での〈解脱〉と〈独存〉とはいかなる関係にあるのか，また〈独存〉とは一体どのような状態なのか—この疑問にラーマーヌジャの記述は明確には答えていないようだ。彼は，解脱とは最高神への到達であらねばならないという信念と，聖典を解釈するには独存を解脱として認めざるを得ないという要請との間で板狭みになっているかの如くである。すくなくとも，ラーマーヌジャにおける〈独存〉ははなはだ分かりにくい，とは言えるだろう。

こういうわけで，ラーマーヌジャ以後ヴィシシュタ・アドヴァイタ派で最大の理論家とされるヴェーダーンタ・デーシカが，独存をどのように処理したかは興味深い問題となるのである。

1.2　さらにデーシカにおける独存が問題となる理由としては，もう一つ，独存をめぐって北方派（Vaṭakalai）と南方派（Teṉkalai）との間で見解の違いが生じたことを挙げなければならない。いうまでもなく，両派は，解脱に至るまでの人間側の努力をどう評価するか，を最大の論点として対立しているが，独存についてもやはり見解を異にしているのである。両派の見解の相違点については，北方派のヴァーツヤ・ランガナータが十八項目について簡略にまとめた *Aṣṭādaśabhedanirṇaya* がよく知られている。その第18章「独存」の記述の概略を紹介しよう[3)]。

まず，独存とは純粋に自己のアートマンだけを直覚すること（kevalātmānubhava）であるが，南方派によれば，独存も解脱であり，これは最高の境地（paramapada）における不滅のものである。そしてその根拠の第一は **GBh** の記述であり，それによれば，五火の明知（pañcāgni-vidyā）を解脱手段とする者とされた

〈独存を求める者〉は，死後，炎に始まる道 (arcirādimārga) を進行し再び現世に還ることがないとされていた。もう一つの根拠は，ラーマーヌジャの高弟クーレーシャ (Kūreśa) が独存を解脱 (mukti) であるとはっきり述べていることである。

一方，北方派では，独存を解脱とは認めない。独存の状態はまだ物質界の中に留まっているのであり，不滅のものではない。確かに **GBh** において五火の明知を解脱手段とする者は再び現世に還らないとされるが，北方派の解釈によれば，彼はブラフマンをアートマン (本性) とする (ātmaka) ところの自己のアートマンを念想する者 (upāsaka) であり，炎に始まる道を進行してから物質界の何処かで自己のアートマンの直覚 (独存) をするが，やがてはヴァイクンタ界に赴き，そこで最高神 (ブラフマン) に仕えることとなる。かかる意味で「再び還らない」と言われたのであって，クーレーシャの言葉もこのことを指す，というのがこの派の理解である。そして聖典 (*Mahābhārata* XII. 328.30f.) もこの理解を支持する。

さて以上の記述は，一見したところ南方派の方が独存をより高く評価しているとの印象を与えるかもしれないが，決してそういうわけではない。南方派の解脱論では，行祭 (karman) とか，ヨーガによって自己のアートマンを直覚するとかいった，人間の側からの計らいを全て放棄して，母猫に運ばれる子猫の如く何もせずに，ただひたすら全面的に最高神に帰依すること (prapatti) によってのみ，人間は最高神に達することができるとされる[4]。これほどまでに最高神に頼りきり，自己のアートマンの直覚すらも人為として否定する者たちが，どうして，自己のアートマンの直覚に過ぎない独存を高く評価できようか。これはまさに“人間の計らい”の極みではないか。また，独存を得たときには，物質的なものよりはましな，自己のアートマン程度は直覚できるかもしれない。が，しかし最高神にはそれをはるかに上回る比較を絶した歓喜がある。ところが南方派によれば独存は永遠に続くのであるから，ひとたび独存に達してしまえば，もうそこから脱することはできず，最高神の歓喜を直覚する機会は永遠に失なわれてしまう。つまり，南方派で独存が「解脱」と言われるのは，ただ単にここで輪廻が終結するということを意味するに過ぎないのである。独存に達した者は確かに再び輪廻することはないかもしれないが，それは同時に，最高神から隔絶した状態が永続するということでもある。独存は，二度と抜け出ることができない，いわば袋小路なのだ。

それと比すれば，独存を永続的なものとしない北方派の方が，むしろ救いがあ

ると言わねばならない。そして北方派が独存を一応評価する—すくなくとも南方派ほど冷たい態度をとらない—のは，彼らが自己のアートマンの直覚を解脱の過程の中に位置づけていることと無関係ではなかろう。北方派でも独存は自己のアートマンを直覚することに過ぎないが，しかし彼らの考えでは，この直覚は解脱までの過程の中の一齣として意味を持つものである。だから彼らは独存を完全に誤ったものとすることはできなかった。そこで，独存は永続せず，また明知の種類によっては解脱の前の独存が介在するものもある，との結論に達したのであろう。このように，両派の独存観の違いは，“人間の計らい”への評価の違いと対応しているものと考えられる。

ともあれ，独存に関する両派の対立点は，次のようにまとめられる。

- 独存は解脱であるか，否か（＝独存は永続するものか，あるいはやがては滅するものなのか）。
- 〈独存を求める者〉（＝五火の明知に拠る者）は，永遠に独存にとどまるのか，あるいは最後には最高神に達するのか。

なお，北方派は南方派よりラーマーヌジャの解脱論により忠実であると言われるが，この独存に関しては，むしろ前者の方が GBh の言葉を会通しようと努めているかのようである。

言うまでもなく，デーシカは北方派のいわば創始者であり，また代表者とされる人物である。そこで北方派の独存観の源泉を知るには，まずデーシカが独存をどう考えていたかを調査しなければならない。またこのことによって，彼がいかにして北方派の説を打ち立てていったかを窺うこともできよう。

---

1) ラーマーヌジャにおける独存について，『印仏研』**40-2**（1992），975-73.　2) 紙幅の都合上，本稿は，ヴィシシュタ・アドヴァイタ派においてそもそも独存は如何なる位置を占めるのかを専ら考察することにし，デーシカの所論の検討は続編［『印度学宗教学会論集』**20**（1993）に掲載］に譲る。　3) Suzanne SIAUVE (ed., trans.), *Aṣṭādaśabhedanirṇaya: Explication des dix-huit différences (entre les deux branches de l'École de Rāmānuja) de Srī Vātsya Raṅganātha*, Pondichéry, 1978, pp. 100-103.　4) 徳永宗雄：Prapatti 思想の歴史的展開。『宗教研究』**45**（1952），519-41.

〈キーワード〉 Vedānta Deśika, Rāmānuja, kaivalya, Vaṭakalai, Teṉkalai.

（東北大学大学院）